

ヘブル人への手紙12章1-4節 「イエスを見つめる競走」

1A 持久走 1

1B 雲のように取り巻く証人たち

2B 自分の前の競走

1C 自分に置かれている行程

2C 捨てるべき重荷と罪

3C 忍耐

2A イエスから目を離さない信仰 2-4

1B 十字架の忍び 2

1C 信仰の完成者イエス

2C ご自分の前に置かれた喜び

3C 辱め

4C 神の右の着座

2B 反抗を耐え忍ばれたイエス 3-4

1C 罪人たちの反抗

2C 心の元気

3C 血を流すほどの戦い

本文

ヘブル人への手紙 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ヘブル 11 章まで来ました。今日は、12 章を一節ずつ学んでいきたいと思います。午前礼拝で、初めの 4 節、1-4 節を見ていて、午後礼拝で 5 節以降を見ていきます。今朝の箇所を、まず全体をお読みします。「¹ こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまとりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。² 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。³ あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。⁴ あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」

1A 持久走 1

ここに出てくる、鍵となる言葉は「競走」です。信仰によって生きることを、競走に例えています。12 章全体を見ますと、著者が言いたいことが見えてきます。それは、ユダヤ人信者が、迫害に疲れ果てて、信仰から離れかけていることです。「疲れ果てて、競走を途中でやめようとして

いる」ことに例えているのがわかります。疲れて、弱ってしまっているのに、しっかりとしなさいという叱咤激励をしているのです。

信仰というのが、いかに競走や競技、また戦いと似ているかを、使徒パウロが数多く、教えていますね。「ピリ 3:13-14 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」ローマで再び牢に入れられて、皇帝によって死刑判決を受けるにあたって、戦い抜いたとの言葉を書き残しています。「Ⅱテモ 4:7-8a 私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。」

そして、ここヘブル 12 章における競走には、「忍耐」という言葉が使われています。つまり、短距離走ではなく、持久力が試される長距離走に例えています。そして、戦いでも短期戦ではなく、長期戦に例えられています。長距離や長期における大きな課題は、疲れ果ててしまわないようにする、ということですね。多くの人が、長距離走を走る時は、初めはよく走ります。しかし、その大半は脱落します。最後のゴールまで完走することを考えている人は、たとえ初めはゆっくりと走っているように見えても、持続して走る方に力を入れているので、完走できるのです。

信仰を持っている人々でも、最後まで走らない人たちが多くいます。信仰の歩みが進むにしたがって、試されます。そこで、神を信じて生きていくことに疲れを感じて、今していることに疲れを覚えてしまいます。そして、初めよく走っている人たちと同じように、目標地点を見失ってしまって、霊的に後ずさりしてしまうのです。そこで、12 章全体で、ただ走るだけでなく、走り続けることができるように励ましているのです。

1B 雲のように取り巻く証人たち

^{1a} こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、

「こういうわけで」とありますが、11 章からの続きです。私たちは前回、旧約時代に生きた人々の、勇敢な信仰の姿を見てきました。数多くの人々が信仰によって生きた証を残していました。そうした彼らの姿を見て、私たちは励まされないでしょうか？そして、彼ら自身は、約束のもの、キリストご自身を見ずして、死んでいきました。しかし、今は約束のキリストが来られました。

そこで、ここでは、彼らのことを、「多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いている」と言っているのです。これは、競走をしている選手を、その周りで歓声を上げて、周りで数多くが応援している姿であります。私は、以前、格闘競技をする兄弟が、私たちの教会に通っていた時に、応援に行ったことがあります。大声で声援を送りますが、兄弟によると、リングの上で戦っている時に、か

なり聞こえるのだそうです。そして、それがそのまま、励ましになります。これが、旧約時代に生きた信仰者の、今の時代に生きる信仰者に対する励ましなのです。「ロマ 15:4 かつて書かれたものはすべて、私たちを教えるために書かれました。それは、聖書が与える忍耐と励ましによって、私たちが希望を持ち続けるためです。」

2B 自分の前の競走

1C 自分に置かれている行程

^{1b} 私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。

私たちは、「自分の前に置かれている競走を」走るように、召されています。他の人には、その人の前に置かれている競走があります。私たちは、他の人が走っている道のりを見ているのではなく、自分自身に、神が置いてくださっている道のりがあり、そこを走るのです。パウロが、エルサレムへの旅で、ミレトスに、エペソの長老たちを集めて、こう言いました。「使 20:24 けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。」パウロも、自分の走るべき道のり、と言っていますね。

他のクリスチャンは、問題がないのに、なんで私だけが？と思ったりしたら、そうではなく、神が自分自身に置いてくださっている道があるのです。イエス様は復活された後に、ガリラヤにいたペテロたちにお会いになって、そこで再び、大漁の奇跡を行われました。そして、ペテロに、「わたしを愛しますか？」と問いかけられ、ペテロが愛しますと答えられると、彼について、「ヨハ 21:18b..あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」と言われます。彼が、殉教することを予告されたのです。けれども、ペテロの目はヨハネの方に向いていました。「主よ、この人はどうなのですか。」と言いました。イエス様は、答えられます。「21:22 わたしが来るときまで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」他の人のことは、イエス様が関わっています、自分が関わることはありません。自分自身がイエスに従うことに集中するのです。

2C 捨てるべき重荷と罪

次に、「一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて」と言っていますね。これは、選手たちが、走るのに邪魔になる、重荷になるものには脱ぎ捨てることを意味します。当時のギリシアのオリンピックでは、選手たちは裸になりました。競走でよい成績を上げるためです。今は、選手たちのために、なるべく軽量のもの、風圧を避けることのできるものが作られていますね。

同じように、信仰の競走において、重荷となるものがいろいろ出てきます。それを、すんなり捨て

ている人と、そうでない人たちがいます。捨てている人たちは、どんどんイエス様が共におられることを経験しています。自分は捨てたけれども、失ったものを補うだけでなく、あり余るほど与えられます。けれども、捨てない人はそれが重荷となり、自分にかせとなって、信仰的に前進できないのです。それで、ついにあきらめてしまいます。

イエス様について行こうとしていた弟子たちに、主が言われていましたね。「ルカ 9:59-60 イエスは別の人に、「わたしに従って来なさい」と言われた。しかし、その人は言った。「まず行って、父を葬ることをお許してください。」イエスは彼に言われた。「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」ここで、父を葬るとは、実際に葬儀が始まる、という事ではありません。父をきちんと葬ってからにします、ということです。だから、ずっと後の話なのです。こういった重荷を自分に課すので、信仰の競走に疲れを覚えるのです。

3C 忍耐

そして、先ほど言いましたように、「忍耐」をもって走り続けます。ヘブル書では、何度となく著者は、彼らが忍耐を働かせる必要があることを教えています。「6:12 その結果、怠け者とならずに、信仰と忍耐によって約束のものを受け継ぐ人たちに倣う者となることです。」「10:36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。」そして、信仰を働かせて忍耐していく時に、主は、私たちのうちにキリストの似姿に形作ろうと、私たちに練り清めてくださいます。「ロマ 5:3-4 それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」

忍耐を働かせて、ますます信仰が精錬されるか、あるいは、こんな苦しみはもうごめんだとして、苦みと罪の中に陥るのか？の、二つの分かれ道があって、どちらを選ぶか？なのです。先ほど、「まわりつく罪」とありました。苦みや不信仰、その他の罪が自分にどんどんまわりついてくる、危険があるのです。絶えず絶えず、自分の目には主がおられないように思えても、それでも主がおられる。それでも、主が、求める者に報いを与えてくださると信じる必要があるのです。そこから、主が、自分にはない、ご自身の聖い心を与えてくださるのです。

2A イエスから目を離さない信仰 2-4

1B 十字架の忍び 2

1C 信仰の完成者イエス

^{2a} 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。

ユダヤ人信者たちに対する、著者の次の勧めは、「イエスから、目を離さないでいなさい」であります。これは、注意散漫にさせるものから目を離して、イエスに目を向けていなさいということです。

イエスに集中してください、ということです。思い出してください、イエス様は御子であられるのに、私たちと同じ姿になりました。そして、多くの苦しみを通られたのです。「2:10 多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいことであったのです。」その苦しまれたイエス様がおられるから、今の苦しみにこの方が同情できないはずがないのです。

イエス様が「**信仰の創始者**」というのは、まず、私たちはイエス様を信じて、救われたということです。私も、この方が、自ら進んで私の罪のために、十字架への道を進まれたことを知って、それで救われました。そして、信仰の創始者というのは、イエスが信仰の対象だけでなく、イエスご自身が私たちに信仰をくださったということです。ペテロが、イエスの御名によって宮にいた、足なえの人を立たせましたが、「使徒 3:16 イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの前で、このように完全なからだにしたのです。」と言っています。

そして、大事なのは信仰の創始者であるイエスは、完成者でもあられるということです。この方を初めに信じて救われるのですが、その信仰を完成させるのも、イエス様なのだということです。私はしばしば、多くの方が、キリスト教を天国教にしてしまっていると話します。それは、救われるために必要なのはイエス様であることを知っているのですが、そのまま、自分の行き先が天国だから、イエス様をその後の生活で見つめていくことが、重要ではないと思うのです。主は、あくまでも、天国に行くためのお守りのようにみなしているのです。

しかし、そうすると信仰のゆえに不都合なこと、試練、苦しみがくると、つまづくのです。イエス様が語られた、岩地に蒔かれた種のように、根がないためにしぼんで、枯れてしまうのです。主が私たちが救ってくださったということは、主が栄光に輝く神の姿そのものの中に、私たちが招き入れるということです。主が神の栄光を輝かせているように、私たちもキリストの栄光の輝きにあずかります。そして、その栄光への道は、苦しみを経るのだというのが、聖書の教えなのです。「ロマ 8:17b 私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

したがって私たちは、救われる時にイエスを見つめて、信じて救われるだけでなく、その後も、イエス様を見つめて、苦しい時はなおさらのこと、しっかりと見つめるということをしないとけません。主こそが、私たちに先立って、苦しんでくださった方だからです。そして、この方が歩まれた道を歩み、その上で、将来の、天における栄光が待っているのです。

私たちは試練を受けている時に、どうしてもこう思ってしまいます。「私がこんなひどい目に遭っているけれども、私が至らないから、何か不足があるから、こんな目に遭っているのだ。だから、他の兄弟たちはこんな試練を通っていないし、ましてや完全なイエス様は、このことに関わってお

られない。」けれども、イエス様は全く違うことを語られます。弟子は主人にまさることはない、と言われます。イエス様は完全な方なのに、それでも世は憎みました。そしてこの方は私たちの主人です。だから、私たちも世から憎まれるのですと言われます。(ヨハネ 15:18-20 参照)

2C ご自分の前に置かれた喜び

^{2b} この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

「ご自分の前に置かれた喜び」とありますね。これは、ご自身が父のもとに帰れるという喜びです。十字架の死のあと、父はご自分をよみがえらせ、そして天に昇ってこの方のところに帰るところにある喜びです。主はご自身の死が近いことを思って、「ヨハネ 12:23 人の子が栄光を受ける時が来ました。」と言われました。それは、十字架の死とよみがえりを経て、ご自身が神の右の座に着かれることであります。

このように、主の受けられた苦しみは、無目的に苦しみを我慢するものではなかったのです。ご自分の前に置かれていた喜びがあるから、苦しみを忍ばれました。同じように、キリストに従う私たちも、主にお会いすることのできる栄光にあずかる喜びがあるので、今の時の苦しみを耐える力が与えられるのです。

3C 辱め

そして、「辱めをものともせず」と言われています。以前からお話していますが、十字架というのは、激しい苦痛だけがその目的ではありません。人々の前での辱めも、大きな目的の一つです。十字架の処刑を受ける者たちは、衣服を脱がされます。そして、大通りで人々が、会話ができるほど近距離で見ることができるところに処刑します。そして、十字架につけられるまでも、あざけり、むち打ち、十字架の木を担いで歩くなど、辱めを目的にしたものなのです。ですから、この方が受けた辱めがあるので、私たちは、福音のゆえに恥ずかしい思いをしても、主は知っていてくださいます。

4C 神の右の着座

そして、「神の御座の右に着座された」のです。これで、救いが完成したのです。同じように、私たちも、この方にあって、天において共に座することになることを約束されています。「黙 3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

2B 反抗を耐え忍ばれたイエス 3-4

³ あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えな

い。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。

1C 罪人たちの反抗

イエス様が、罪人たちの反抗を耐え忍ばれました。罵られ、中傷され、あざけられ、平手で打たれ、十字架刑に処せられました。十字架の上でさえ、神の子なら、キリストなら、そこから降りてこいと罵られました。こんな不条理な訴えが、ご自身になされたのです。

この方のことを考えなさい、と著者は勧めます。考えるというのは、よく考える、じっくりと考えるということです。私たちはとかく、すぐにイエス様から目を離してしまいます。そして、不条理にあうと、自分はなんと哀れなのだろうと、自己憐憫に陥ります。そこで忘れているのは、イエス様がその苦しみをすでに耐え忍ばれているということなのです。

2C 心の元気

そこで、「あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするため」ということなのです。私たちの問題は、イエス様が共におられることを忘れてしまうことです。信仰の競走をしている時に、まるでコーチと一緒に走っているかのように、イエス様も走ってくださっているのです。ゴール地点では、この方にお会いするという目標でもあるのですが、その途中、走っている時は、もうひとりの助け主である聖霊が、私たちと共にいてくださり、イエス様を証ししてくださるのです。だから、一人ではないのです。

この聖霊の励ましをもって、私たちは互いに励まし合います。私たちが集まる時に、聖霊が働いてくださいます。そして、それぞれの試練や苦しみに、イエス様が会ってくださるのです。「10:25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」

3C 血を流すほどの戦い

⁴あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。

ここで言っている「罪」とは、イエスを主として信じて告白するのに、反対するところの罪です。主イエスは、ご自身が御子でキリストであると告白されて、それで血を流されました。そして、この方を信じる者たちも、血を流して殉教しました。しかし、今、ヘブル人の信者たちは、殉教するまで抵抗したことがないと言っています。その前に、恐れて退いて、ユダヤ教の神殿礼拝の中に埋没しようとしていたのです。

ここに、私たちへの強い戒めがあります。それは、日本は迫害がない国だと言われますが、私もある程度、そうだと思います。けれども、迫害を受けないように、自分たちで前もって抵抗しない

で、同調したり、迎合しているのではないか？ということです。迫害や試練があると、それが起こらないための対策をすぐに練ってしまうのです。主を試練から救ってくださる方にするのではなく、自分で試練にあわない方策を練って、自己防衛してしまうのです。そうやって、主ご自身の生きた証を失ってしまいます。

私たちの前に置かれている道には、将来の栄光の喜びが約束された苦しみも含まれています。その試練や苦しみを、どのように受け止めるか？まずは、イエスから目を離さない。そして、この方がどのように罪人の反抗を忍ばれたかを、よく考えるところにあるのです。